

「地球人」として生きる

大阪教育大学附属池田中学校 2年 越智 晴己

僕は二歳から十一歳までの九年間ドイツに住んでいた。僕の通っていたインターナショナルスクールは五十以上の国から生徒が集まっており、多様性に富んでいた。僕は初対面で相手の人種を聞くことはない。例えば、クラスに転校生がやって来たら、まずは学校に慣れるようにサポートする。そして、数か月経って親友になった後で、必要ならば、お互いの国や家族について話すのだ。国籍や家族はとてもプライベートなテーマで、知り合ってから話すには適さない。僕の親友の一人であるパントスは、国籍はアイルランドだがいろんな血が混じりすぎていて、もはやどこの国がドミナントなのか分からない。だから出身を聞かれると困るらしい。ちなみに、彼は自分を「地球人」と呼んだ。僕達は違う文化と歴史を持っていて、自分のものだけが正しいと主張すれば、誰かが怒ったり悲しい思いをすることもある。だから僕は詮索しない。デンマーク人のノアにはお父さんが二人いてお母さんがいない事や、トルコ人のエレムが断食中には水しか飲まない事も、僕は「そうなんだ」と納得した。

二〇一五年、メルケル首相の難民受け入れの発言を受け、内戦続きだったシリアやリビアから大量の難民がドイツにやって来た。僕達は彼らのためにできる事を探し、学校の玄関に、衣類や食料を寄付するためのボックスをいくつも置いた。また、僕の八歳上の姉は、難民キャンプでドイツ語を教えるボランティアを始めた。僕も姉と一緒に引っ

てみた。そこにはお金も荷物もほとんど持たず、国を追われてやってきた人達が大勢いた。小さな子供の姿もあった。僕はその光景を見て、もっと何かしたいと強く思った。クラスの皆で話し合い、十二月に難民の子供たちにクリスマスプレゼントを贈ろうと決めた。自分達がもらったプレゼントの中から一つずつ持ち寄り、寄付することにした。僕達にとって大切なものだったけれども、それをもらった誰かが喜んでくれるならば、惜しくないと思った。

小学六年生の時、僕は日本に帰国した。周りから、「帰国子女ですごいな」と言われ、「何でもハキハキと発言するし、嫌なことは嫌とはっきり主張する」と僕は思われているようだった。しかし、実際は少し違う。いろんな国の人達と仲良く暮らすためには、違いを主張したり詮索したりするのではなく、時には黙って受け入れる寛容さが大事だと考えているからだ。

日本は、難民や移民の受け入れが少ない。その理由として、まだ受け入れる準備ができていないという意見がある。しかし、僕は、恐れずに受け入れるべきだと思う。初めは問題が起こるかもしれない。しかし、失敗を乗り越えて共に生きるノウハウを身につけたならば、社会はより強く豊かになる。そして、多様化が進んで行けば、僕達は国の枠を越えて「地球人」となるだろう。それを実現するために、僕は常に考えて行動したい。